

あの頃の風景

千葉県 浦安市

復建エンジニアリング
川瀬喜雄 KAWASE Yoshio



写真1 - 昭和31年の境川(現在の市役所付近) 海苔網の支柱を運ぶべか船がゆったりと進む

浦安市は東京湾最奥部、旧江戸川の左岸に拓けた街であり、現在では「東京都心に隣接したベッドタウン」、「住民平均年齢が若い街」、「東京ディズニーランドがあるアミューズメント都市」といったイメージを持たれる方が多いと思う。

浦安の歴史は、明治22年に堀江・猫実・当代島の3村が合併し浦安村となったことから始まる。その後明治42年に町制が施行され浦安町となった。市制が施行されたのはそれから実に72年後の昭和56年4月である。

作家山本周五郎は昭和3年から1年あまり浦安に住み、この地の様子を名作「青べか物語」に著している。その頃の浦安の地形は、埋立て開発以前であり、東西2.2km、南北4.2km、沿海線7.2km、総面積4.43 km²で現在の浦安市の面積の約1/4であった。また、住民たちの多くは魚介類を採って生計を立ており、漁師たちは出漁に便利な境川に漁船を繋留しその付近に密集して住み始めたため、浦安町は境川を中心として発展していった。ちなみに、「べか」とはべか舟のことであり、その頃浦安をはじめ東京湾全域でみられた一人乗りの海苔採取用の木造船のことである。周五郎の描いた、楽天的でたくましく、時には狡猾さを持ち合わせながらも素朴で純情に生きる町民の姿は昭和初期の漁師



写真2 - 現在の境川、江川橋付近 親水護岸が整備され、周囲は市街地化された

町浦安の様子を克明に表しているとも言える。

また、浦安は「交通事情の変化」によって大きく姿を変えていった街でもある。昭和15年の浦安橋開通までは、東京に一番近い町でありながら陸上交通の発達から取り残されてしまったため、渡し船や定期船を中心とした水上交通に頼らざるを得なかった。鉄道の開通は、昭和44年の地下鉄東西線全線開通まで待つこととなる。

しかし同線の開通は浦安と都心をわずか17分で結ぶこととなり、これが東京のベッドタウンとしての都市化がはじまった瞬間でもあった。その後、東京湾岸道路やJR京葉線も開通し陸上交通は次第に整備されていったが、それに伴いつての漁村の面影は次第に失われてきている。

今では、大規模埋立地に造成された東京ディズニーランドや高層ホテル群、整然とした町並みを誇る住宅街が浦安のシンボルとなっているが、市も郷土史教育に非常に力を注いでおり、漁師町・浦安の歴史は今後も脈々と受け継がれていくことであろう。



写真3 - 昭和15年の旧江戸川 浦安橋の前を行商の船が行きかっている



写真5 - 昭和40年代後半の東西線江戸川鉄橋と境川西水門 多くのべか舟が停泊している



写真4 - 昭和初期の浦安沿岸部の風景



写真6 - 現在の境橋欄干 昔の漁の風景の写真が飾られている

(写真提供) 浦安市郷土博物館



写真7 - 現在の新浦安駅周辺の市街地 高層住宅を中心とした近代的な新興住宅地として今も開発が続いている



写真8 - 現在の東京ディズニーランドに沿って建つ高層リゾートホテル群 かつての浅海の海は、国内きってのリゾート地として生まれ変わった